

ラブレター名台詞 番号

語りも含む

東(洋)

1 愛の往復書簡 アペールとエロイズ 12世紀 1741年詔許

《第2書簡》エロイズ⇒アペール
妻という呼称の方がより尊く、面目が立つように思われるかもしれませんが、私にとっては愛人という名の方がいいです。甘美に響いたものでした。お気を悪くされないで、**妾あはれは嬌婦と呼ばれてもよかったです**。」「(皇帝アウグストゥスの)皇后であることよりも、**あなたの情婦とみなされることの方が、私にとっては喜ばしい**」岩波文庫 斎藤良彦・横山安由美 訳 p108,109 と、結婚の程を意識しつつ二人の関係の純粋性を表現している。「あなたからのおざりにされ、忘れられてしまい、いらっしゃって話によって元気づけていただくことも、いらっしゃらなくてもお手紙で慰めていただくこともまらでかなわぬありさまなのは、いったいなぜなのでしょうか。」
同 p113 「うら若いこの身を過酷な修道生活の中に閉じ込めたのも、信仰心からではなく、ひとえにあなたのご命令あればこそでした。」「神への愛から行ったことなど、何ひとつないからです。神のみもとへ邁進されるあなたの後を、私も修道服をまとって追いかけてました」 p115

《第3書簡》アペール⇒エロイズ
「今は娘たち(修道院内の女性たち)を世話しておられるなら、それで十分だと思われるのです。ですが、あなたの謙虚な心にはそう思われず、神に関すること、文書に書かれた形で私の指導が必要かどうかというなら、望むところに関してお手紙をください。」同 p121,122 と野暮な返書。

《第4書簡》エロイズ⇒アペール
エロイズは「あなたと分かち合った愛の喜び—それは欲望をかきたててやみません。眠っているときさえも、その幻影がつきまとってきます」同 p150 「燃えたぎる情欲が、それはそれは激しく肉体を燃え上がらせる始末です」同 p152 「どうかそんなに私をかきかぶらないでください。——私が強いなどは思わないでください。あなたの腕に飛び込むよりも先に、よろめいてしまいかもれません」同 p154、「私は私の弱さを告白します。勝利に向かって戦うつもりはありません」同 p157、と。

2 狭き門 アンドレ・ジイド(仏) 1909年

私(ジェローム)は、従姉アリサを昔から慕っており、結婚したいと思っていた。彼女はそれを気づいていたが、(彼女には、自分の母は不倫出奔していることからと思われるが)結婚を避けたいと思っているようだった。私からのプロポーズにアリサは、「あなたは思い違いをしているのよ。あたし、そんなにたくさんの幸福は要らないの。このままであたしたちは充分幸福じゃなくて？」 岩波文庫 川口篤訳 p53 と素っ気ない。その後私は、ギリシャに言語調査の公務がありしばらく故郷ル・アールを離れた。その間、彼女は縁もないワリの療養所で暮らすのを選択し、鬱を昂らせて世界した。やがて公証人経由で、アリサの日記が私のものに送られてきた。そこには、哀切あふれる心情が綴られていた。それを本心であったのだ。今までとはまったくことなるものだった。——《**何度か虚空に向かって私ジェロームの名を呼んだこと、ジェロームからの手紙をずっと待ち続けたこと、全身全霊でジェロームを求めたこと**》——これらは私ジェロームがアリサに求めたのと全く同じだった。私(ジェローム)はそれを知って涙が止まらなかった。『**ジェロームが言うように、初めは、私(アリサ)に対する愛が彼を神に導いたとしても今はその愛が、邪魔をしているのだ。ジェロームは私にかかずに、神よりも私(アリサ)を大事に思い、私は彼の偶像となって、彼が更に深く徳の方へ進むことを妨げているのだ。二人のうち、せめてどちらかが徳に達しなければならぬ。**』 同 p196

大関 2 野菊の墓 伊藤左千夫 明治39年

政夫から民子への手紙 **それでも僕は十六日の午後になって、何とはなしに以下のような事を巻紙巻紙へ書いて、日暮に一寸来た民子が居なくなってから見てくれと云って渡した。**『朝からここへ這入ったきり、何をやる気にもならない。外へ出る気にもならず、本を読む気にもならず、**ただ繰返し繰返し民さんの事ばかり思っ**て居る。民さんと一所に居れば神様に抱かれて雲にでも乗って居る様だ。僕はどうしてこんなになつたんだろう。学問をせねばならない身だから、学校へは行くけれど、**心では民さんと離れたくない。**民さんは自分の年の多いのを気にしているらしいが、僕はそんなことは何とも思わない。僕は民さんの思うとおりになるつもりですから、民さんもそう思っていて下さい。明日は早く立ちます。冬期の休みには帰ってきて民さんに逢うのを楽しみにして居ります。』
十月十六日 政夫

自己犠牲というよりも深層では(ラシーヌ、バカールを例示しつつ「ジャンセニスム」(純粋への執着)を自認している。p95,143,146 彼女の「天国への門は狭い」とする姿勢に戸を叩きつつも、半身はギリシャへ逃げている。彼女もそもそも無縁のハリで没

3 片恋 ツルゲーネフ(露) 二葉亭四迷訳 明治29年

ドイツのライン左岸を旅する私(ロシア人)は、たまたまあったロシア人兄がギン、妹アーンヤと仲良くなった。その後しばらく付き合ううちに、アーンヤは私に恋をしていうようになった。ローライの景色をほめたり、プーキン詩集を読んだり、踊ったりと楽しい日を過ごした。そのうちギンが私に、妹とずっと話を重ねてやってくれたいというので私たちは別の部屋で逢った。うっとりとしていた彼女はやを少し開いて額は大理石のように輝いていた。握っていた手を引き寄せると、体は寄り添ってしまった。彼女のショールは肩からおちて、首はそっと私の胸元へ、もえるばかりに熱くなった唇の先へ来た。アーンヤは「**死んでも可いいわ**」※と云った。聞き取れるかどうかの小声だった。
※ ロシア語の原文では、「**私は(or私)——**」とあるだけになっているのを二葉亭四迷はこう訳した。巷間、ここには「I love you」相当の言葉があったとする説があるが、間違いであろう。類似のエピソードは、翻訳者を夏目漱石に換え、漱石が英訳の講義中に、「I love you」を直訳する愚を指摘し、「むしろこういときは『月がきれいですね』と訳すべきだ」と話したという「伝説」があるが、誰かの作り話であろう。すくなくとも漱石にそんな著述はない。

関脇 3 良寛と貞心尼 良寛和尚(宝暦8年(1758)~天保2年(1831)と貞心尼(寛政10年(1798)~明治5年(1867))

越後の港町、出雲崎の名主、橘屋の長男、18歳の時、出家し曹洞宗の僧侶となった。22歳~32歳、岡山県玉島の円通寺の国仙和尚のもとで修行。の結果、悟りを得た。道元禅師の『正法眼蔵』から、仏道は己自身のためではなく人々を救うためのものと会得する。
貞心尼は、もと長岡藩士奥村五兵衛の娘で、一度医師に嫁いたが5年で死別。尼の共同生活ののち、福島(長岡市)の閻魔堂に移った。文政10年(1827)——良寛70歳、貞心尼30歳——、貞心尼が良寛の書、歌の高名を聞き、木村家をたずね置手紙にて修行の申し出でをたのが切っ掛け。以後、二人は交際する(その態様には諸説あり)。良寛の臨終直前、【良寛】いついつとまちにし人はきたりけり いまはあひ見てなにかおほむ【貞心尼】 **生き死にの境ひ離れて住む身にもさらぬ別れの有るぞかなしき**【良寛】 うらを見せおもてを見せて散るもみぢ【貞心尼】 来るに似てかへるに似たり沖つ波—— 貞心尼は歌の指導で良寛のもとへ修行と語られることが多く、禅の指導のことは目だっていないが、『蓮の露』のなかではうかがえる。

4 あしながおじさん ジョン・ウェプスター(米) 1912年

ジョン・ウェプスター孤児院のジュディ・アボット14歳は明るくて意思のはっきりした女の子。幸運にも奨学金を得て大学に学ぶ機会をジョン・ミス理事長から認められた。条件は手紙を定期的に書くこと。その後の交友関係を通じて、ついにある人物(ジャビーさん)から求婚された。理事長とジャビーさんが同一人物であること知って驚いた。もちろん求婚を受け入れた。
『**あたし——ほんとにさびしいのよ、ジャビーさん——でも、これは楽しい気持ちのまじったさびしさよ。あたしたちは今度こそほんとうにお互いのものになったの、見せかけじゃなく。あたしがどうとうだれかのものになるなんて、愛ですわねえ？ なんだか裏にうれい気持ちよ。——**』、『P.S. これはあたしが生まれて初めて書いたラブレターです。あたしがラブレターの書き方を知ってるなんて、おかしいでしょ！』 岩波文庫 遠藤寿子 訳 p280,281

小結 4 和泉式部日記 和泉式部 長保5年(1004)頃

式部は、夫橘道貞との冷えた関係の中で、為尊親王(冷泉帝第3子)との関係を持つが、ほどなく為尊親王は没。替わってその弟敦道親王からの求愛を受ける場面。
『**御宮様からこれ(手紙)持て参りて、いかに見給ふと奉らせよ**』とのたまはせるとて橘の花を(小舎人童が)取り出でたれば、(式部が)『**昔の人の**』※と言はれて、(小舎人童が)『**さらば参りなむ。いかに聞こえさすべしと言へば、(言ったので、式部は)「言葉にて聞こえさせむもかたはらいたくて、「何かは。あだだしくもまだ聞こえたまはぬを、はかなきことをも」と思ひて、薫る香によそふるよりはほとどぎす聞かばや同じ声やしたる**と聞こえさせたり』
※『五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする』(古今集 読み人知らず) この歌を思い出して、いいじゃないかの気になって、その求愛に応える。



ラブレター名台詞 番号

語りも含む

東(洋)

5 赤と黒 **スタンダール(仏)** **1884年** 前頭筆頭

仏東部ブザンソンの田舎町に住む貧しい樵夫リルの息子ジュリアンは、なかなか眉目秀麗、学業優秀で、神童の誉れ高かった。レナル町長宅の家庭教師から、町長夫人の伝手でハリ社交界に出て、ラ・ロール侯爵の令嬢マチルドと結婚し、貴族地位と頭職を手にした。だが侯爵が彼の出自についてレナル夫人へ照会したことに対して、夫人がありがたい、彼の「のしあがり方」への不快さを述べたことで、彼は、愛憎、嫉妬、地位への執着、その他さまざまな感情の交錯から、夫人をピストルで撃った。だがそもそも夫人が彼を今まで最真目に見ていたこと、背景には、彼女の彼への愛情、しかもそのプロセスの中でマチルドらへの嫉妬とこもこもとなった複雑な未練もあったのだ。

幸い夫人は命を取りとめたが彼は捕まり裁判となった。彼は、犯行は怨みによる謀殺であること、貧しい農民の生れで立身出世をしたが今さら同情を乞うつもりはないこと、死が当然の報いであることを淡々と語った。彼の恬淡とまた毅然として語る姿に傍聴人は胸を打たれたが、その後夫人は彼のもとにきた。彼は過去のことをしみじみ思い出さることができた。『あのヴェルジーの森を散歩していたとき、わたしはずいぶん幸福になれたものを、あのときは激しい野心がわたしの心を空想の国の方へひっぱって行ったのです。わたしの唇のすぐそばにあったこの美しいかわいいうるしの腕を胸にじっとおしあててくることしないで、未来のことは考え、あなたを忘れていた。』 岩波文庫 桑原武夫・生島遼一訳 下 p453

ジュリアンの判決は死刑となった。マチルドの強い要望にもかかわらず彼は控訴しなかった。彼の遺骸はかねてジュリアンが望んでいた山の高峰の小さな洞窟に埋葬された。処刑の3日後レナル夫人は亡くなった。

5 藤十郎の恋 **菊池寛** **大正8年初演**

元禄十年頃のこと、京は四条河原中島にかかる都万太郎座の座元、名人と評判の坂田藤十郎でも、最近では江戸からやってきた中村七三郎の人氣が急上昇となっているのが気になっていた。これまでも出し物も飽きかかってきているようだった。そこで、今度は近松門左衛門に「大経師昔暦」の戯作を書いてもらい、それを演じるようになったが、その場面の中に人妻との不倫の場面があり、それをどう演じたいのか迷っていた。何しろ実際の不倫はきついでござりであり、そんな場面は日常生活で見聞するものではなく、まして簡単に役として演じられるものでなかったからだ。そこで藤十郎は、立女形の霧浪千寿を相手にその所作を日々考えたがなかなか分らない。そこで、藤十郎が考えたのは、実際に人妻と恋をし、そのとき女がどういう気持ちになり、どういふ表情をし、そういう所作をするかを捉えてみたいというものだった。そこで、なかなかの美貌の持ち主、芝居茶屋の宗清の女房お梶を相手に恋路に誘った。座の離れ座敷にいたる長い廊下の隅で、何か書き物を手に悩む姿を見せながら、お梶を待った。そして彼女を呼びとめ、別室に誘った。『うお梶どの。そなたは、藤十郎の嘘偽りのない本心を、聴かれて、藤十郎の恋を、あわれと思わぬか。二十年来、忍びに忍んで来た恋を、あわれとは思えぬか、さりとは、強いお人じやのう。』お梶は、最初は戯れ言と相手にしなかったが、流石は役者坂田藤十郎の「演技力」にからめとられてしまい、すっかりその気になってしまった。お梶は震えながらそれは本心かと訊いた。すると藤十郎もおなじく震えながら、『てんごうをいうてなるものか。人妻に言寄るからは命を投げ出しての恋じゃ』そして今や後戻りできない、陶然とした絶望感と淫靡な無力感にひたっていた。藤十郎はお梶のその瞬間、瞬間のもの言い、表情、所作をしっかりと自分の脳裏に焼きつけた。

さて、その後しばらくして、座内で噂がたつた。「藤十郎どのは、今度の狂言の工夫に悩んだ揚句、ある茶屋の女房に恋をしかけ、密夫の心持や、しぐさの形を付けたということじゃが——」藤十郎の女形の相手、千寿にもそれは聞こえたようだ。そして役者どうしの酒席となったとき、藤十郎は千寿にこう切り出した。『千寿どの安堵めされい。藤十郎、この度の狂言の工夫が悉く成りもうしたわ』

今やすっかり自身をつけた藤十郎だった。そして、その幕が上がろうとしたとき、奥の楽屋で、「自害じゃ、自害じゃ」の声が聞こえた。それがお梶だということがほどなく藤十郎にもわかった。藤十郎はお梶の遺骸を見て恐怖におののいた。が、急に気を変えて、「なんの心配なことがあるものか。藤十郎の芸の火気が女子一人の命などで傷つけられたよいものか。——さあ、千寿どの舞台じゃ」千寿は「あいのう」と受けた。藤十郎は一旦舞台上へ急いだが、また引返して思い決したように退場した。

6 谷間のゆり **バルザック(仏)** **1835年** 前頭2

「私」フェリクス・ド・ヴァントネスはブルボン王家を支持する王党派の田舎遺族の末っ子として生まれた。郷里のモルソフ伯爵邸での舞踏会で大胆にも、伯爵夫人の美しい肩にきまして以来※① 彼女を慕った。※②

※①『かすかに薔薇色を帯びて、生まれて初めて肌を見せたかのように、顔をあらわしているかと思われる肩、さながら魂が宿っているかのようなうしろの肩——その縋りの光沢をもった膚は、光を浴びて羽二重のように輝いているのです』 岩波文庫 宮崎嶺雄 訳 p31

※②『私は、舞踏会以来の気持ちで正直に告白した。「あなたは僕の偶像、神にもまさる崇拜を献げる偶像です。僕のゆりです。僕の花です。」』同 p247

夫人は「私」がハリ社交界での評判をあげていくことに、喜び感じるとともに、一方で私が浮名を流していることに表には表さないが、激しい嫉妬を燃やしていたのだ。 (私と英国女性アベル・ド・レトの関係)。夫人はやがて病いを得て、床に伏した。彼は駆けつけた。『あなたの思い出のうちに、いつまでも美しい気高い女として、それこそ永遠にささほころゆりの花のように生きていたかったですのう——』 同 p405

彼女から、死後に読んでほしい手紙を渡された。その中には、舞踏会での私のキス以来、夫人の私への愛が赤裸々に書かれてあった。『わたしが嫉妬深い女だっというごことはよく申し上げましたわね、』『あなたはわたしの心の支配者なのですもの』 同 p430

6 不如帰 **徳富蘆花** **明治34年初演**

陸軍中将片岡子爵の娘浪子は、海軍少尉の川島武男に嫁ぎ、幸せに暮らしていた(伊香保温泉での蕨取り)が、もともと彼女は、実家では継母から疎まれていたという事情があったことに加え、川島家では姑が小うるさかった。夫は仕事柄軍艦に乗って家にいないことが多いので、なかなか窮屈な生活だった。そんな中、彼女は結核を患っているのが判明した。こうなると姑は浪子を離縁させようと考えた。ちょうどそこに、千々岩という武男の従兄で彼女に恋慕していた金にルーズな男と、山木という他人の事情をかき回すのが大好きな商人がいる。山木の娘は武男のことが好きで、武男・浪子夫婦が離縁した後の後金を狙っているようだ。このふたりが母親に結核の恐さを吹聴し、離縁をけしめつけるものだから、母親(浪子の姑)はいよいよその気になり離縁話にまで持っていく。浪子の荷物を実家に送り返すまでする。もちろんそんな動きに武男は反対し続ける。浪子はそれらを見て泣きに泣いた。

なお話は少しもどって、浪子は結核と判ったからは、片岡中将は逗子にもつ別荘で療養生活をしていた(その地にある不動尊の岸近き海中に「不如帰碑」がある)。武男は海軍基地横須賀へ行く途中によく浪子を見舞った。ここで浪子は自分の体調を悲しく語る。『なおりますわ、きつとなおりますわ、——ああ、人間はなぜ死ぬのでしょうか！ 生きたいわ！ 千年も万年も生きたいわ！ 死ぬなら二人で！ ねえ、二人で、』『浪さんが亡くなれば、僕もいきちゃおらん！』 岩波文庫 p102

全体の寸評

『往復書簡集』は、特に第4書簡が、西洋文学で、女性の書いたラブレターとして最も熱情的なものとして名高い。 対して『たまき書状』は、女が示す、男の身につけていた肌着への女の愛情の深さ、——ちょうど都はるみの「北の宿から」にあるような——纏綿たる情を感じさせる。こんな「纏綿たる情」というのは、西洋文学にはないものだろう。

『狭き門』のシエロムとアリサの関係は不可解。作品中の表現、「シエロムはジエンセント※」という説明から分かる気もする。(旧教内の少数派・虚弱・薄弱な生き方が好きのよう)これに対して、『野菊の墓』の正夫と民子の恋は、淡いというか、気の抜けたラムネのようなものか? 漱石が激賞したといわれているが、もともと漱石作品にはラブシーンはほとんどない。また、和泉式部の感性はみずみずしい、花の香にかこつけて愛を表現するのは一貫之の主義のよう。一方、ひどい男もいるものだ。『赤と黒』のジュリアンは、「愛情半分、偽り半分」の男、それがいつしか法廷のヒーローになっている。日本側にもひどい男がいる。坂田藤十郎は、「全部うそつき」の悪者。その冷たい言葉は、この「台詞」に極まる。『谷間の百合』はなかなか歯の浮くような台詞だ。イライラするような場面だ。対して、同じイライラするような代表格は「不如帰」。不思議なのは、「不如帰」の武男は、周囲の者らの示唆から、愛する夫婦なのに離縁せざるを得なくなった。とある。本当か? 武男は帝国海軍少尉か。別れた後は、日清に向かうはず。京都・山科駅で、二人は偶然行き交う列車の窓で再会した。浪子がとっさに投げたハンケチはその後別れの小道具となった。

結局形は離縁したことになるが、二人の気持ちは変わらなかった。武男が戦争で怪我をして佐世保に入院していたときに、浪子は武男に差し入れを送っている。その後、武男は一旦横須賀にもどり、それから時局の変化に応じて台湾に向かわねばならなかった。横須賀を経由して東海道線に乗り、広島・呉に向かった。一方、病気の愛さを消すために、浪子は父中將と娘とともに奈良・京都旅行をしていた。ちょうど宇治のあと京都・山科駅まで来て、上りの汽車を待っているとき、汽車の発車寸前、向かいに下りの汽車に武男が乗っているのを見た。『浪子は悪の外にのびて上がり、手に持ってるすみれ色のハンケチを投げた』 同 p211

『武男は狂えるごとくハンケチを振り、何が呼べると見つ』 同 p211

やがてこれを最後に二人の邂逅はくぐり彼女はいなくなった。その最後の病床で浪子は加藤子爵夫人に、武男にと託して手紙を手渡した。台湾での戦役から還つた武男はそれを読んだ。『もはや最後も遠からず甞え候まゝ一筆残しあげ参らせ候 今生にては御目もじの節もなきこと存じ候とこそ天の御憐みにて先日不慮の御目もじ申しあげうれしうかし汽車の内のこととて何も心に任せ申さず誠に誠に御残り多く存じ上げ参らせ候』 同 p225